

日本アニメーション学会賞 2021 選考結果・贈賞式のご報告

■日本アニメーション学会賞 2021：

『東映動画史論 経営と創造の底流』

木村 智哉 著 (2020年 日本評論社刊)

贈賞式

日時：2021年6月27日（日）17:20

日本アニメーション学会第23回大会（オンライン開催）にて配信

※大会参加には参加費が必要となります。詳細は以下をご確認ください。

<https://jsas.net/conference.html>

※取材申込みの際には下記お問い合わせ先までご連絡ください。

選考委員

権藤俊司（東京工芸大学芸術学部アニメーション学科 准教授）

野口光一（東映アニメーション企画部 シニアプロデューサー）

萩原由加里（帝京大学文学部日本文化学科 講師）

吉村浩一（法政大学文学部心理学科 教授）

米村みゆき（日本近現代文学研究者／専修大学文学部 教授）

■贈賞理由

学会賞／木村 智哉 著『東映動画史論 経営と創造の底流』

木村智哉氏の著書『東映動画史論 経営と創造の底流』は東映動画、すなわち現在の東映アニメーションについて、その創造の歴史を、会社組織としての経営、さらにアニメーションの産業や労働としての側面からも考察した研究である。

先行研究においては、副題にある「経営」と「創造」が個別に分析される傾向が強かった。東映動画に関わった人物、また特定の作品を取り上げたものが多くを占めてきた。しかし、本書は従来のような個別研究とは異なり、会社としての東映動画の歴史について、発足の前段階から補章として触れた1990年代に至るまで、ゆるやかに時代ごとの変遷を追っている。

さらに複数の側面から東映動画を分析した点はもちろんだが、本書で取り上げられる史料も注目に値する。東映動画に残されていた資料のみならず、労働活動に関する裁判の記録も調査し、さらに関係者に対するインタビューなども行い、今まで知られていなかった東映動画に関する一次史料を丹念に収集・分析した研究の成果である。東映動画に関する社内資料を用いた先行研究としては、社史が挙げられる。しかし、会社側の立場に立ち、通史としての東映動画の歴史を編纂することを目的とした社史とは、本書は一線を画している。そもそも社内の人間すら現存していることを把握していなかった一次史料が、このような形で多くの人々が知りえる形になったことは、東映動画という一つの会社に留まらず、今後のアニメーション研究においても非常に有益である。

選考においては、木村智哉氏の日本アニメーション学会における研究活動が反映されたものであり、さらに歴史学という一つの学問分野の枠に留まらず、社会学など幅広い分野で本書は参考文献となっていくとの判断から、学会賞を贈賞するに至った。（選考委員・萩原由加里）

■「日本アニメーション学会賞」について

「日本アニメーション学会賞」は日本アニメーション学会（1998年創立）の創立15周年記念事業として2014年に創設されました。

「日本アニメーション学会賞」は主としてアニメーション研究者の顕彰・奨励を目的としております。またその授賞対象は会員に限らないものとしました。これは現状においてはアニメーションあるいはメディア芸術の分野における顕彰・奨励が伝統的な分野とは異なり作家・クリエイター中心であり、創り手以外の研究者や教育者・批評家などへの顕彰・奨励の機会のごく限られたものであるからです。本学会員の間でも、かねてよりこれを解消すべき大きな課題であるとする意見が少なからずありました。

本学会がこの賞を設けることにより、これまで顧みられることの少なかった研究者の顕彰、特に若手研究者の奨励を実現させたことは、学会としての社会的使命の一つを果たすことに繋がるのではないかと考えます。「日本アニメーション学会賞」がアニメーション分野あるいはメディア芸術分野の学術研究の活性化を促し、その一層の発展に寄与することを本学会員一同、心より願っております。

日本アニメーション学会ではこの賞を本学会員皆の力で支え育て、末永くまた大きく発展させていきたいと希望しておりますので、関係各位の皆様のご理解とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

日本アニメーション学会会長 須川亜紀子